

平成十二年十二月十日 和敬塾予餞会記念講演

「外から見た日本人」

皆さん、こんにちは。

私は来日して今年で十七年になります。十七年とはいっても、もう既に大人になっていまして、考え方や言葉の構造はすべて韓国的に完成されてから来日しております。いまでは日本のはかなり分かっているつもりですが、なかなか体がついていかない部分もたくさんあります。

その中の一つは言葉の問題ですが、韓国人が日本に来て日本語を勉強するときに最も難しい発音があります。それは大人になって日本に来た場合、何十年たっても直らない発音です。韓国語には濁音と清音の区別がありません。つまり「ㄱ」(てんてん)ですね。これがないために、話に夢中になっていたり、緊張したりしますと、「濁音」が「タクオン」になったりします。その点はお聞き苦しいかと思いますが、ご理解いただければと思います。

これは口でうまく言えないだけではなくて、耳で聞き分けることもできません。ですから日

本人が言う単語、熟語を書き写そうとしたときには、いつも「テンテン」があるのかないのか困ってしまって、必ず「テンテンはありますか」と聞いてしまっているのです。「テンテン病患者」だといわれているのです。そのようなこともあるので、全体の流れで内容をつかんでいただければありがたいと思っております。

世界の言語の中で、韓国語と日本語が、最も敬語と謙譲語の使い方が多いといわれております。ところが、その敬語の使い方が韓国と日本では全く逆になることがあるんですね。どのように逆かといいますと、韓国人は徹底した儒教社会ですので、自分の身内をたてる言い方をします。例えばうちに電話がかかってきたときに、「うちのお父様におかれましては、いま、いらっしやいません」という言い方をしなければいけません。日本語のように「うちの父は、いま、ちよつと出かけております」と言い方になると、教育がなっていない家庭とされてしま

います。こういう日本式の敬語の使い方は理屈では分かかっていてもなかなか自分の口で言えません。

作家 エッセイスト 吳善花先生

0 Sourfa

例えば自分の会社の社長が田中さんだとして、第三者に向かって「いま、うちの田中はちよつと席をはずしております」という言い方は、韓国人からすればとんでもない会社だという感じになります。自社の「社長様」のことを、「うちの社長は」という言い方をするといいは、私自身が非常に社長様のことをバカにしているかのようになってしまふのです。その点が、多くの日本人が韓国人と話をするときや、あるいは韓国に行つて韓国人と話をしているときに、いつも腹が立つ言葉でもあるんですね。これが下手な日本語で話をしていけば、何となく意味さえ通じればいいのですが、上手な日本語で話をしながらも、「うちの社長様におかれましては」という言い方になりますと、何と生意気な人たちだろう、という印象を受けてしまいがちです。

逆に私が来日したばかりのところ、日本の会社に電話をかけたときにとてもショックを受けたことがあるんです。「鈴木社長様はいらっしゃいますか」と聞いたところ、若い女性が「うちの鈴木は、いま、ちよつと席をはずしております」という言い方をされました。そのときに私は本当に驚いて、「もしかしたら、この鈴木社長様におかれましては若い女性社員になめられているに違いない」と、そういうふうに思っていたんですね（笑い）。これは一つの例にすぎないのですが、日本も韓国も言うまでもなく他の国に比べると最も似ております。顔つきも全く一緒ですし、文化的にもほかの国に比べると、やはり一番似ていることは言うまでもありません。似ているためにちよつとした文化の違い、習慣の違いなどが、なぜか習慣の違いとしてではなくて、お互いに抵抗を感じる間柄となってしまうているんです。これが全く顔色の違った別の国の人であれば、「まあ、外国人だから、それは習慣の違いがあるだろう」という認識がどこかにあるでしょう。けれども全く同じ顔色をした人が、お互いに全く行儀の悪い態度を示してしまうと、どうしてか不思議にもそこには習慣の違い、文化の違いとしての話にはならないのが、現在の日韓のあり方そのものでもあります。

そういうことで、私が非常に細かいところに

注目するようになったのは、来日して数年たってからのことなんです。比較文化的にいえば、日本人と私が話をしていても、どうしてもギャップが感じられるんです。けれどもこのギャップを埋めることがなかなかできないと感じたときから、もしかしたら実は、文化や習慣の小さな違いが大きな誤解を生んでしまっているのではないか、と思いました。そしてその小さなところから、現在、日本と韓国というの「近くて遠い国」だと言われてしまっているんです。お互いに理解できないということですね。これは政治的なレベルでも、普通の民間レベルでもそういうふうになっています。

その最も根本にあるものというのは、本当に小さなところにある違いからくるものだということが、やつと分かりました。ですからこの小さな違いを何とか乗り越えることさえできれば、ほかのどの国の人よりもより分かり合える国柄だと私は考えておりまして、そのような作業を十年前からいろいろな本を書いて行っております。

本はたくさん出しておりますが、ここでその中の話を全部することはできません。ただ本日は短い時間の間に、最も根本的な違いと、韓国人が日本に来て日本人とつき合うときにどのようなプロセスを歩んで日本を理解していくかということ、これを語ることによって現代の

日本と韓国のあり方がくつきり見えてくるのではないかと思います。そこから日本のことも多少見えてくるのではないかと考えております。その意味でも単なる一部の例にすぎないかもしれませんが、そのような話をしていきたいと思っております。

韓国人にとって、日本という国は、どうしても分かるようではない国なんです。というのは、韓国人は戦後、反日教育を受けたというところもありまして、イデオロギー的側面から日本を見るという面があります。しかし韓国人による反日感情のあり方をよく見ると、単なるイデオロギーの問題だけではありません。文化の違い、習慣の違い、考え方の違いが、イデオロギーの問題と一緒に重なってしまっていて、何がイデオロギー的な問題で、何が習慣の違いなのか分からなくなり、そしてごちゃ混ぜになつて混乱しているのが現状です。

ですから例えば日本人とつき合つて、私と何か行き違いが生じるときがあります。そうしてもはや日本人は分からないということになつていったときに、「やつぱり何かあるのかな」ということになつていきまして、そこに何が重なるかといいますと、歴史の問題です。歴史の問題が一緒に重なつてしまつてることが大きな問題になつていっているんですね。

もちろんそのようなことがあるにしても、それをはっきりと分けて考えていかないと、何が日本人的で、何が韓国人的なのか、何がイデオロギー的な問題で、何が文化的な問題なのかということに分かからないままになってしまします。

韓国人の場合は、とにかくさまざまな日本人論が最近たくさん出てきています。その中でも日本批判をする本が圧倒的に多くて、日本批判の本を書けば売れるという感じになっていきます。ところがそれらの大半はまともな批判になっていないというのが、私の感想です。先ほど言いましたように、どこかで文化の違いとイデオロギーの話が一緒になってしまっていますから、いくら批判をしたとしても、それが現実的に役立つものではないとつくづく感じるんですね。

それでは何が問題かというところ、日本を見るときに、どうも分かるようではないところ、ところが問題となっていくんです。例えば日本の天皇を見るときに、韓国もほかの国もかつては王様がいましたから、韓国の王様と日本の天皇が同じであるかのように一見、見えます。

しかし日本人とつき合ってみると、日本人の天皇に対するイメージが、どうも王様と違うという感じが出てきてしまう。そして、どうも分からないということになっていきます。日本に

来て日本人とつき合っていますと、日本人は極めて礼儀正しいと感じられます。日本人の礼儀の正しさというのは儒教から説明できるのではないかと言われますが、実はそれだけでは説明できなくなってくるんですね。

そして微妙なところがそこに生じるのですが、そこから、「日本人は分からない」ということになって、「日本人はそこを直さなくてはならない」ということになってしまっているのが現状です。これは韓国以外の外国人からの日本バッシングもそうです。その微妙なずれについて、なぜ違うのかということを考えようとしなくて、とにかく自分の国の価値観や文化のあり方に日本を当てはめて見て、そのずれが生じた部分は、全部日本バッシングになっていくわけです。そこから「日本人はあまいですから直さない」ということになっていくのですが、実はそこに大きなポイントがあると思うんですね。そこにもつと目を向けて、なぜ違うのかということを見ていくことが最も大事だと思うのですが、残念ながら韓国などではそのようなことはなかなか現在まで出てきていないようです。

そういう意味で、私がお話したいのは、日本人と韓国人が長くつき合いをするケースです。最近はかなりいろいろな場面で行われているんですね。それは政治的なレベルを超えて民

間レベルですが、例えば日本人が韓国に行ってビジネスをしたり留学をしたりするよりも、数としては韓国人が日本に留学生として来るとか、ビジネス関係で滞在する場合のケースのほうが圧倒的に多いです。また長く滞在することが多いですね。そのときにどのように日本人を理解していくのか。これは自分の体験を踏まえながらお話をしたいと思います。

来日して一年目はとてもいい印象を持ちます。かつて韓国では、特に戦後、日本人というのは本当に反省もできない、血も涙もない人たちだということをやつと教えられてきたのですが、日本に来て日本人とつき合ってみますと、とんでもないことだということが分かります。日本人は極めて親切ですし、優しく、町並みはきれいですし、治安はよくて、日本人こそ本当に人間的に生きているのではないか、という気分になっていくんですね。そして韓国人同士が集まって「いやあ、日本って本当にすばらしいね」ということを言います。

ただし韓国人は公の場ではなかなか「親日的発言」をしたがらないですし、日本人の前で、日本はすばらしいと誉めることが苦手です。つまり韓国人同士もそうですが、相手を誉めることは自分が低くなってしまいうような気分になつていくこともあるので、なかなか相手を誉めたがらないということもあります。しかし一

年目は、韓国人が集まりますとみんな日本のことを誉めるんです。韓国も日本に学ばなければならぬとか、日本から韓国を眺めてみると、韓国人こそが本当に野蛮人的ではないかという気分にもなっていくんです。そうして一年は非常にいい気持ちで日本で暮らすことができます。

ところが一年が過ぎたときから問題が生じるんです。二年目と三年目です。一年目はただ表向きのつき合いだけをしていけばよかったですし、言葉にしても非常に軽い日常会話さえできればよかったです。ところが一年が過ぎていきますと、それだけではすまないわけです。もっと一歩踏み込んだつき合いが欲しくなっていくますし、言葉にしてもより深い理解を含んだ言葉を使いたがるときもあります。

そうしたときに「やっぱり日本人は分からない、日本人は本当に野蛮人的だ」という言い方になってくるんですね。人によって程度の差はありますが、大体の韓国人は二年目、三年目に落ち込みます。私の場合は極端に落ち込んだほうですが、これを何とか乗り越えて五年ぐらい日本にいたことができれば、今度は再び日本の良さが見えてくるんですね。

一年目に日本はいいなと思っていたことの、そのときはただただ表向きで何となくいいなと思っていたことの素顔が、だんだん見えてき

ます。日本人は本当に深く、多様性、多元性に富んでいるということがだんだん分かってきて、「これが日本だ、あれが日本だ」と一言で言えないくらいになっていくんです。そして十年ぐらい日本にいれば、大体は日本が好きになっていきます。十年ぐらい日本にいながら日本の批判をする韓国人がいるならば、それは多分、頭と体が分離していると思うんですね。つまり体では日本が非常に好きだと思っっているといっていると思います。

私などは本当に日本が大好きになりましたが、問題はこの二年、三年をどのように乗り越えていくかということです。多くの韓国人は日本に来て、日本語を勉強して、あるいは専門学校を卒業して帰りますと、ちょうど二年、三年で戻ってしまうケースがよくあります。

そしてどれほどこの二年、三年が危ないかと言いますと、たまたま数年前に韓国で本が出版されました。二年半、日本に滞在した人による本ですが、これは批判というよりは、めちゃめちゃに日本をけなした本です。そのような本が韓国で百万部も売れてしまいました。大ベストセラーになった問題作です。これを読んでみますと、私がかつて二年、三年で日本人が理解できなくて苦しんでいたときの話が、そのまま全部書いてあるという感じなんです。例えばこのようなことを書いています。

私は二年半、日本に滞在していて一つよかったことがある。それが何かというと、日本に生まれなくて韓国に生まれたことがどれだけよかったのかということに悟ったということである。なぜかといいますと、一億二千万の日本人全部が正常な人間ではないからということです。つまり人間ではないという言い方をしているんですね。本来の姿からかなり外れた人たちなので困る。最近、韓国では日本に学ぼうという声が高いのだけれど、そのような日本に学んで絶対にはいけないし、例えば学んだとしても日本のような国になつてはいけないということをお私に言いたい、と彼女は書いているんです。

そしてなぜ普通の人間ではなく、みんな異常なのかということをお私に書いてくださるんですが、例を挙げながら書いているんですが、何とそれはすべて文化の違い、細かい習慣の違いです。このような本は書いたということは別にしても、なぜ売ってしまったのかということも問題があるのですが、例えばこのようなことを書いています。

韓国人も日本人も部屋に入るときは靴を脱いで入ることは一緒である。しかし靴を脱いだまま部屋側に向けて、たとえ乱れていても、そのまま部屋に入るのが韓国人である。そして出るときはそのまま履いて外に出る。これが本来

の人間のあるべき姿ではないのか、と書いています。しかし日本人はわざわざ体を後ろにねじ曲げて、靴を外向けにしてそろえて置いて、再び内側に体をねじ曲げて部屋に入る。これがシンボリックに日本人の心を語っている。すべての日本人はこれと同じく、全部ねじ曲がった心の持ち主だという書き方ですね。恐ろしいことです。

あるときに日本人の家に遊びにいきましたら、その日本人の友達のお母さんが、自分の靴を外側に向けてそろえて置いたということです。帰ろうとしたときに、自分は間違いなく靴は内側に向けて置いたのに、外側にそろえて置いてあったということです。その友達のお母さんの、韓国人に対する偏見に満ちた行為には許しがたいものがあつたということなんです（笑）。何の罪もないお母さんのことの悪口がそんなふうに書いてありますから、これは恐ろしいことです。

単なる似たような文化じゃないですか。靴を脱いでいくことまではいいのですが、なぜかそれを文化の違いだということを認めないで、韓国的な発想に当てはめて、違うところはみんな人間じゃないということまでバッシングしているわけです。最初から最後まで全部そのようなことです。

私はこれを読みながら、二年、三年で韓国に

戻つてしまったならば、本当に私も同じことをずっと思い続けていると思つたんです。そして彼女は最後に、私は日本を死ぬまで恨み続けていきたい、ということと締めています。これを何で百万人も人が読んでしまうのか、というところが大変問題です。その本の読者は大体若い層です。日本に一度行ったことがあるとか、留学したことがある人たちにたくさん読まれているということです。そして書きすぎたことがあるかもしれないんですが、なるほど思いますが読まれたところに問題があるんですね。

例えば私の場合は、その小さな習慣の違いから、目に見えるところでも抵抗を感じていたものがたくさんありましたが、その一つの例を挙げます。どんなことかといいますと、日本人も韓国人もお米を主食にするんです。これはアジアの国にみんな共通しているのですが、韓国と日本はご飯の炊き具合が全く一緒ですね。アジアの大半の国の場合は、炊き方が粘り気のないばさばさとしたご飯が好まれます。中国にしてもチャーハンを見ると、典型的です。とにかくばさばさしているほうがいいんです。好まれているんですね。

ところが韓国人も日本人と同じく粘り気のある日本のコシヒカリのようなお米が一番好まれていて、日本に来ると日本のお米というのはおいしいとみんなが言うんです。それから韓

国人にとつての味噌汁も欠かせないものです。そして味噌汁もおいしい。おかずなどは韓国のキムチに比べると日本の漬物などは味気がなくて物足りないということを感じているんですが、ただただご飯とお味噌汁だけでもすごくありがたく感じます。

ところがご飯の食べ方を見ると、韓国人には全く抵抗のある行儀の悪い食べ方を日本人みんながしています。どのような食べ方かといいますと、左の手に茶碗を持ってご飯を食べるということは、韓国人にとつては最も行儀の悪い食べ方です。左の手は絶対テーブルの上に持つていつてはいけません。食器に触つてはいけません。もとのことです。ところが日本人は左手で茶碗を持つて食べている。

お椀となりますと、味噌汁を飲むとき、みんなが口に持つていつて直接飲んでいるんですね。これも何とも抵抗が感じられてならないものです。しかし私もそうでしたが、韓国人はそういうふうみんな感じているのに、日本人からは「いやあ、韓国人の食べ方、あれは何とかしてくれませんか」ということを言われるんです。

なぜかと聞きますと、犬食いのようだということです。韓国人は茶碗を食卓に置いたままでスプーンでご飯を食べて、スプーンもスプーンで飲んで、お箸でおかずを食べるんですが、何が

大食いのように見えるかといいますが、韓国では取り皿という習慣がありません。ですからおかずといってもみんなが共同で食べる同じ種類の物が一つしかないです。真ん中に置かれて、四方から全部はしを伸ばして、手を伸ばして、それを食べます。自分の物というのはご飯とスプーンだけです。

魚にしても一匹、真ん中に置かれて、それを四方から手を伸ばして、はしを伸ばして、みんな食べますから、おいしいところは早い者勝ちです。それはいいんですが、真ん中に置かれた鍋物——韓国でも鍋物は欠かせないものなんです。これも取り皿がありませんから、四方から手を伸ばしながらスプーンを口に直接運ぶことを繰り返します。ですから、当然、お汁などがテーブルの上にならだと落ちたり、ほかのおかずの上に落ちたりするんです。韓国人にとっては何とも感じないものですが、日本人にはそれが何とも抵抗があつてならない、ということを言われるわけです。

例えば、皆さんがインドに行つて、インド人はカレーライスを手で食べますということと言われれば「これは文化の違いだからやってみようじゃないか、挑戦してみましよう」ということになります。けれども不思議と、韓国と日本、全く同じ顔色をした人が全く行儀の悪い食べ方をしていますから、これは許せないという

気分しか生まれなくなるのが日韓の間柄です。大体がそんなものです。似ているために起きる誤解、それからくるトラブルなんですね。

そのようなことがたくさんありました。ただ目に見えるものというものはそれほど大きな問題ではありません。大体一年も日本に暮らしていれば、いつのまにか無意識に茶碗を手にとって食べるようになるんですね。そして韓国人と韓国で一年も一緒に暮らしている日本人は、いつのまにかお魚のおいしい部分をみんなとやりとりしながら先に食べたりすることに、抵抗がなくなるとなつていくんです。ですから目に見える習慣というのはそれほど大きな問題ではありません。

問題は、感覚をつくるもの、これは目に見えないものですが、これが大変です。目に見えれば何とか形だけでもやっていくのですが、目に見えないものとしては、人間関係にしても、物にしても、感覚、感性が全く違うところがあります。例えば私が見て、これは美しいと思つているものがあるとしますと、それは韓国人にとつて普遍的なものです。韓国人のだけが美しくて美しいものと思われるものが、日本人から見ると大体が美しくないものとなつていきます。善と悪がまるで違うことなどがたくさんあります。そういう意味で、今日は多くお話しすることはできませんが、一つだけちよつとお話をし

たいと思います。

まず一年が過ぎていきますと、私の場合は言葉の問題がありました。韓国語と日本語の場合は語順が全く一緒です。ですから英語を勉強するほど難しくありません。逆になつていくとか、発想を逆にもつていく必要があります。日本語の発想、韓国語の発想でそのままではめればいいことになります。例えば「私は韓国人です」と言うときは、そのまま「私は韓国人です」という言い方になつていくんですね。

それから韓国も漢字文化圏です。ただし韓国は戦後、漢字を勉強していません。いまの人口の八割はハングル世代だといわれているんです。これは戦後、漢字を廃止したためです。ただしハングルのもとにある単語の意味は、日本語以上に漢字語がたくさん使われています。八〇%が漢字語です。ですから直訳しますと、日本語以上に漢字語がたくさん使われています。つまり日本語をすべて平仮名に変えたことと同じだと想像していただければ分かりやすいと思うんです。それが韓国語ですが、ただその発音も意味も似ている部分がたくさんあるのですね、韓国人が日本語を勉強するとき、あるいは日本人が韓国語を勉強するときにはすべての単語を覚える必要がないです。あるところまで覚えていきますと、だんだんそれからは想像で使えば、大体当たります。

私もいまだに初めて使う単語などは想像で使うんですが、運が悪ければ外れたり、ということはあるんです。でも多くは当たります。それほど同じ文化圏だと言ってもいいんです。しかし私が先ほど言いましたように、一年が過ぎたときは単なる意味としての言葉の伝達とは違う、もつと深みのあるところにまで入っていったときに難しくなっていくんです。

そこで日本語で韓国語には全くない特徴があるんです。その一つとしては、日本語は受け身形が極めて多いです。例えば、先生に「言われて」「この本を読んでいます。皆さんに「見られて」「恥ずかしいですね。いやあ、そう「褒められる」と恥ずかしいですよ。そんなに「怒られる」とわたし、どうにもなりません、という言い方です。

しかし韓国語は日本語のようにすべての動詞を受け身形にすることはできません。幾つかの単語を除いて能動態しかありません。ですから、先生がこの本を読むように「言った」から私はこれを読んでいきます、社長がここに行くようにと「言いました」から私はここに来ました、という言い方しかありません。しかし日本語の場合はこの能動態も受け身形もありますから、能動態を使うときはかなり強調したいとき、あるいは強く自己主張をしたいときなどに使いますね。

韓国人が日本語を勉強していて、この受け身形がうまく使えているかどうかというところを見れば、多分、その人の日本語が上手かどうか分かるくらいです。ですから韓国人が日本語を勉強して、日本人と話をするとき極めて能動態を多用する言い方をします。それでなくても日本人に比べて韓国人はやはり性格が強くきついです。それで能動態ばかり使っていますから、とてもきつく聞こえてならないのです。

逆にいえば、日本人が韓国語を勉強するときには、受け身形を何とか韓国的にもつていこうとする発想がそこに働きますから、非常にソフトに聞こえてならないです。日本人のとても強そうな男性が韓国語を習っていたときも、とても女性的な言葉になっていくんですね。ただし韓国語には女性言葉、男性言葉はありません。それなのにムードとして非常にソフトになつてしまうところはあるんです。

この受け身形を勉強するときに、何でわざわざ日本語は能動態を使えばいいのに、受け身形を使うのかということに困ってしまったんですね。そして日本語学校に通っていたときに、私は受け身形は難しい、と言ってさぼってしまったんです。ところが大学を卒業して社会に出てみると、テレビを見ても、日本人と何としても深くつき合おうとしたときは、この受け身形なしでは日本語がほとんどの意味、微妙なニュ

アンスが受け取れないほどたくさん使われているんですね。

私もいま、「使われている」という言い方を使いましたけれども、「使っています」という言い方しか韓国語にはありません。そうすると、この言葉をうまく使うことが大事じゃないか。つまり私が二年、三年目で日本のことをとても理解できなくて苦しんでいたときに、もしかしたらこの日本語の受け身形に日本人の気持ちがあるんじゃないか、日本人をシンボリックに物語っている何かがあるのではないかと、じわじわと感じていったんです。そしてこの受け身形を徹底的に自分なりに習得してみようかと思つていきました。そうするとかなり意識しながらこの言葉を使えるようになっていくんですね。

そうするとどうなるかといいますと、体を反対にもつていかなければならないような気分になっていったんです。例えば、「皆さんに見られて恥ずかしいです」という言い方をするとき、韓国語の場合で、「皆さんが私を見ているから恥ずかしい」と言ったときは直線的です。しかし「皆さんに見られています」という言い方をするとき、私がそれを言えるようにするために、意識していましたが、体をくねつと反対側に曲げるようなイメージで、これを使つていったんです。そうじゃないとこれがス

ムーズに使えなかつたんです。だんだん慣れていきますと、今度は体までいなくなって、頭だけでもくねっと曲げるイメージで使っていたんです。

それともう一つ、反省をすればこの言葉はうまく使える、と思いました。極めて反省的な言葉だったのです。例えばここに私が飲みたいと思っただけのコーヒを、だれかが飲んでしまったとしますね。そのときに韓国人でしたらまず言葉も発想も、「だれかが私のコーヒを飲んでしまったんだ」と、飲んでしまった人を恨みます。私のおいしいコーヒを飲んでしまったら、とんでもない人だ、という気分になつていくんです。ところが日本語となりますと、「いやあ、飲まれちゃった」ということになりません。皆さんも多分、「だれかに飲まれちゃった」というふうに言うと思います。

そのときに確かに相手を恨む気持ちよりは、自分が悪かつたという気持ちがあるに働きます。なるほど、自分を反省していれば、この言葉は使えると思つたんです。そして至るところで、私が悪かつた、悪かつたという気持ちを込めてこの言葉を使つてみたんです。

あるときに日本人の友達とタクシーに乗ろうとして待つていました。とても急ぐときだったんですが、タクシーが来て手を挙げたら、私たちよりもちよつと先にいた人が先に乗つて、

さつと行つてしまつたんです。そのときの悔しい、という気持ちは日本人の友達も私も同じだったんです。

そこで同時に出てくる言葉は何かというと、私は、「とんでもない人だね」という言葉で、先に乗つた人をすごく怒っているんですね。あの人は車の陰に隠れていて、もうちよつと前に出てくればいいのに、という言い方をしているんです。ところが日本人は、「いやあ、乗られちゃった」という言い方をします。そのときに、確かにその日本人は相手を全然恨んでいないんです。私がもう少し先に出ていて気をつけていれば先に乗れたはずなのに自分が悪かつた、ということなんです。

そしてあるとき高速道路を走つていたときもそうでした。どこかの車に追い越されたのですが、私は、「とんでもない人が追い越してしまつた」という言い方になるんです。ところが日本人は、「いやあ、追い越されちゃった」という言い方をします。それで自分が反省していけばこの言葉は使えるということなんだん分かるようになってみると、本当に日本人は至るところで反省、反省ですね。

そのくらいはいいんですが、泥棒に「入られた」という言い方には本当に驚きました(笑)。泥棒が入つた場合は、いかなる場合でも泥棒が

悪いのに間違いはないのに、泥棒に入られるようにしてしまつた自分が悪かつた、ということなんです。かぎを閉めなかつたとか、もうちよつと気をつければよかつた、ということなんです。

意味としては同じですが、これを聞く第三者の場合には、「泥棒が入つた」という言い方をするときは泥棒の顔が見えてくるんですね。どんな顔をした人なのか、怖い顔をした泥棒なのかというイメージで、とんでもない泥棒という気持ちになるのですが、「泥棒に入られた」という言い方をするときには、入られた人が非常に惨めに見えてならないですね。何でだらしないんだらう、という気分になつてきます。

そのようなことがたくさんあります。考えてみれば韓国人は身近なところでも本当に反省しないです。例えば約束に遅れたときに、日本人はすぐに「ごめんさい」という言い方を先にしますね、どんな理由があつても。ところが韓国人は何かのわけを先に言いたがるんですね。家を出ようとしたときに電話がかかつてきて、とか、お客さんが来てしまつて、という言い方になつて、それから申しわけないという言い方は後ですか、結局はしないということなんです。

しかし日本人は、あなたと私の間でとにかく申しわけない、という言い方を先にしなければならぬと考えます。本当にこんなに日本人が

反省好きなのに、何で韓国人は「日本人ほど反省できない民族はいない」という言い方になってしまっているのか。そういうイメージになってしまっているのか。これが残念でならないと思っただけですね。

そうしてみると日本ではいたるところで反省ばかりです。例えば日本人はある会合が終わった後で、必ずといっていいほど反省会を開くんです。あるときに反省会に行きましよう誘われて——これも「誘ってくれた」のではなく、「誘われた」んですね（笑）。そして考えました。そんな反省会に行けば間違いなく、皆さんワイワイ泣きながら、今日は悪かった、悪かったと言っているに違いない（笑）。そして上司から盛んに怒られているに違いない。そんなところに行きたくない、と思いつつも行って見ました。そうしたらだれも反省なんかしていませんね。皆がお酒を飲んで、ワイワイと「今日はよかった、よかった」という言い方をしてるんですね。

例えば今日、何かの失敗をした場合で落ち込んでいる人がいるとすると、上司は必死になって慰めるんです。「いやあ、大丈夫、今日のことはもう水に流して、明日はまた明日の太陽が昇るんだからさ」という言い方になるんですね。何で反省会という名前をつけるのか（笑）。日本人はただただ飲んで遊んでということに對

して、それだけでは何か申しわけないという気持ちがあるんです（笑）。ですからどこかで反省の気持ちだけでもちよつとおいておこうということ、反省会というのかもしれないですね。

それから例えば学校で論文を発表した後でも、なぜか日本人の先生から、ほとんど必ず、最後に「反省点はどのへんですか」ということを言われたりします。私は自分が一生懸命に頑張った論文を全部書き終わったのに、そう聞かれたときはすごく反発を感じたんですね。「私は反省することはありません」という言い方をしてしまったんですが、とにかく反省することが大好きな日本人だということが分かりました。それが言葉から分かったことです。

そしてもう一つですが、日本人の距離感のあり方の問題です。日本人の美意識にもなるんですが、「間（ま）」をとるということを最も大事にするんですね。感情的になりそうだと思うと、ちよつと間をおきます。「間」という言葉は非常に大きな、日本語の特徴的なものですが、韓国語にはその「間」という言葉がありません。例えば韓国人の場合は、町を歩くときに女性同士だと必ずと言っていいほど腕を組んで歩きます。これは男性同士も極端な場合は腕を組んで歩く人たちがたまに見られるんですが、何で町を歩くのに腕を組んで歩くのでしょうか。

多分、皆さんはテレビの場面で見たかと思うんですが、前に韓国の全斗煥・元大統領と盧泰愚・元大統領が死刑宣告を受けました。それで裁判場に出たときに二人で横に並んで立つんですが、そつと手を握るんですね。その手を握っている場面を見て、日本人から見たら気持ち悪いという言い方をしていましたが、韓国人はそれによってすごく血が繋がっているかのような気分になっていくんです。

先日、韓国の金大中大統領（当時）が北朝鮮に行きまして、金正日と車の中で四十分か一時間、ずつと手を握っていたという話を聞くんです。これも日本人からしてみれば、男同士で何と気持ち悪いということになるんですが、その気持ちは韓国人はよく分かるものなんです。手を組むことによっていきなり、相手と私、あなたと私の間に距離感がなくなっていくんです。

ですから、たとえ初めて会った人でもいかにして早く距離感を縮めるかということが大事になってきて、この人と気が合うと思うとまず手を組みます。腕を組んだその途端に、私の心臓まで出してあげたくなる気分になっていくんですね。血と血が繋がっているかのような気分になっていきます。

そうやってまず何を言うかという、自分の内面的な話をべらべらとしゃべっていきます。

私はこんなことがあってとか、いかに自分が大変なことであるか、ということを手相に言うんですね。私はこんな悩みがあって、こんなに大変なことがあって、と言うと、相手のほうは、あなたはそんなのは大変じゃないよ、私はもつと大変なことがあるのよ、と言ひ合うんです。そうすると悩みがもつと膨らんでくるんです。

これが韓国人にとつての人間関係です。そこそ心が通じる人となつていきますから、すべてを出してあげたい気分になつていくんですね。そのような関係をいかにつくるかということが大事なポイントです。いかにして早く距離感を縮めるかということ、そしていかに全く距離感をなくして、熱い熱い関係をつくるかということですよ。

そのような韓国人が日本に来て、私もそうでしたが、どうも日本人は表向きでは極めて優しく親切だけど、一歩入つてつき合おうとしたときには距離を置こうとする。そのたびに寂しいと思うんです。例えば私の周りには日本人しかいなかったのです。そんな熱い熱い関係をつくりたいと思うんです。そしてなかなか日本人はオープンしてくれないので、私の方から一生懸命に頑張つて入るんですね。

その方法として、例えば学校で何人かの仲間が集まつて弁当を食べるとします。その時、私はある方法を考えたんです。友達の手当の中

からおかずを一個、ぽつと取つて、おいしそう、と言ひながら食べてしまったんです。そのときは皆ににらまれて、変な顔で見られて大変だったんです。ものすごく寂しい気持ちでした。やはり日本人は韓国人に対して差別的だと思つたんです。

ですから実はいま、差別的だといわれることは大体そのようなものです。私が早く距離感を縮めるためにしたことは、韓国人であれば自分のおかずを食べてくれた人に対して感謝する気持ちが出てきます。「私とそこまで仲よくしたいのか」と思うのですが、日本人にはなぜかそうしようとすればするほど逃げられてしまうので、どうもこれは差別的だということにしかならなかったのです。

そしてもうショックを受けてなりませんでしたが、実は大体の韓国人は日本に来てその熱い熱い友達関係ができないということがみんなの悩みなのです。韓国人と同じく、手を組んで、私の悩みとあなたの悩みを全部語り合う関係をつくりたいのに、日本人はなかなか語つてくれない。

そして私もあるとき分かつたんですが、日本人はそのような関係になるまでは少なくとも二〜三年間のつき合いが必要だということですよ。そしてたとえそのような関係になつた人であっても、自分のそんな大変なことは相手に

きるだけ言わないものです、と言われたときは本当にショックでした。「だって日本人だつて人間でしょう」と思つたんです。なぜ日本人は相手に言わないのか、と訊きかえて分かつたのは、日本人は少なくとも自分の親友、一番大事な人にはできるだけ負担をかけたくないという気持ちがあるわけですよ。韓国人は仲のいい間だからこそ負担をかけなければならぬです。ですから相手にどんどん負担をかけることが韓国人にとつては大事なポイントです。

私が韓国に行った日本人から聞いたことですが、ある学生が韓国に留学して下宿しました。一人しか日本人がいなかったのです、周りの韓国人から珍しがられて、よく遊びに来られたそうです。よく来るので、日本から持つていったコーヒを飲ませたら、おいしい、おいしいと飲んだので、いつでも飲んでいいよと言つてあげたそうです。そしてあるとき外から帰つてきてみたら何にもなかった(笑)。そして私がすごく怒られたんです。別に私が飲んだわけではないのですが、韓国を代表して怒られたんですね。また、いつのまにか部屋に入つて、テーブルの上に小銭があればそれを勝手に持つていって、ジュースでもたばこでも買ってしまつて、極端な場合は靴下も履いてしまつて、パンツも履いてしまつて、歯ブラシも使つてしまつてということなんです。これは皆さんは汚いと思われ

かもしれないが、韓国人の友達関係はそこま
でしないと友達だという認識にはならないん
ですね。それができるからこそ友達だ、という
ことです。

大体の韓国人は日本に来て、そのような関係
を求めて日本人の中に入ろうとしても、日本人
には距離をおかれてしまう。それは単なる態度
だけではなくて、言葉の性格もそうです。すべ
てを言ってしまうとつまらないという感覚が、
どこかあるんですね。例えば私の悩みごとも、
すべてしゃべろうとしたときに、「いや、いい
です。全部聞いても、私、つらいんですよ」「も
うどうにもならないから、そこまでいいで
す」ということを言われます。話を切られるん
ですね。すべて言わなくても分かるということ
を、よく言われます。言わないのにどうして分
かるんですかということ不思議に思っ、盛
んに相手に言ったりしたんです。

後でそれがなぜなのか、ということ私はず
つと見つめたときに、やはり日本の中には間を
とるという美意識があつて、ある程度間をおく
ことによつて相手をじっくりと察することが
できるんですね。余りにもべたべたとした場合
は、かえつて相手のことが冷静に深いところま
で見つめることができなくなるんです。これが
まさしく日本人だけの独特な人間関係のあり
方です。

日本人は相手を察し、いま、相手が半分ぐら
いしか言ってくれなかったが、そこから、その
後は私が想像したいという気持ちがあります。
すべてを明らかにしてしまうと、それほどつま
らないものはないんですね。そこにある程度の
神秘性も欲しいわけです。そして私の想像性を
そこに生かしたいという気持ちがあるんです。

そしてそこで「慎重」が生まれるということ
です。相手をずっと察しながら、相手がいま言
いたがるもの、主張したいものが何かというこ
とを引き出すことが大事である。そして私が主
張したいことをそこに出して、いかに調和をし
ていくかというのが日本人なのだなと分かっ
たんです。それはすべてが余りにべつたりとし
た関係のときには見えない、ということでもあ
るんですが、これは日本人独特のあり方です。
例えば韓国人が日本に来ると、極めて日本人は
人の話をよく聞くという印象を受けます。
韓国人は人の話を本当に聞かないです。もう自
分の話だけをいかに相手に言うかということ
ばかりするんです。だから日本に来るとすごく
気持ちいいですね。

しかし欧米の一部の知識人もすごくよく相
手の話を聞きます。ところが人の話を聞いた上
で、全くその態度が違ってくるんです。欧米人
の場合は一生懸命に相手の話を聞いて、私が主
張したいところとどこが違うのかということ

を出して、自己主張するために聞いています。
あなたと私の話は九十九%までは合っている
けれども、そこでの一%の違いはここにあるん
だ、ということをも自分で主張したために相手
の話を聞くのです。

ところが日本人の場合は一時間話をしてい
て、そこで大体九十%は合わなくてもいいのだ
と、十%だけでもいいから相手と私がどこで一
致点があるかということを引き出すんです。で
すから一生懸命聞いているんです。今日は百%
得ることができなくても、単なる十%得られた
ことだけでも感謝したいという気持ちがある
に働くんですね。そして引き出して、あなたと
私の間で調和してものが生まれること、これが
日本人の調和主義です。

日本人は極めて集団主義だといわれます。そ
の集団主義のあり方は農耕民族の共同体から
くるものだといわれるときがありますが、そこ
まで遡つても現代の日本人と実際につき合っ
てみたら納得できませんでした。さらにそれ以
前の、日本人が自然と一体化して生きていた時
代、つまり縄文時代まで遡っていきますと、よ
り自然と密着したときの生き方、感覚、感性が
非常に強くて、その気持ち現代に生きている
と思ふんですね。

私の場合、日本人は自然に対する極めて受
け身的な思想を持っていると考えております。

ですから自然を私の中に受け入れて、そこできかに調和をしていくかということ、それが日本人の人間関係で、相手の話をいかに私の中に受け入れて調和をしていくかという発想になります。ここから、二人より三人、さらにそれ以上が集まれば、よりいいものが生まれてくるんです。

韓国人は「集団で協力し合うことが苦手だ」ということが言われますが、確かにそうです。ところが日本人は集まれば集まるほど、何かそこでものが生まれてくるんです。これがまさしく日本人の調和主義なんです。つまり自然に対する受け身思想が働いて、自然を受け入れて私の中で調和をしていこうという発想がそこに生まれてきます。

結論になりますが、韓国人も含めて外国人が日本に来て、分かるようで分からないと悩んでいたところというのは何か、と考えた場合、私は現代の日本を大きく二つの世界に分けて考えると分かりやすいと思います。その一つは欧米化された日本。これも日本です。これも外国人には分かりません。もう一つは農耕アジア的な日本があります。これもアジア人は大体感覚として分かるんです。

ところが日本の中にはもう一つの世界、農耕アジア以前の世界が強く残っていることが分かったんですね。これは先ほど言いましたよう

に、自然とともに生きていた感覚・感性が残っているということ。単に残っているのではなくて、この三つの世界が対等に混在しているのが現代の日本だということが分かりました。多くの場合、近代化とともにこの自然的なものは薄れていきます。韓国にもあるにはありますが、どちらかというとイデオロギー的なところが、近代社会の中央にまではほとんど入ってこないのですが、日本人にとっては極めて自然なものです。

これらが対等に混在している世界がこの日本だということが、私は最近分かったのですが、その三つ目の世界こそ外国人が分からないので困るところです。それを多くの外国人は、「日本人は直さなければならぬ」「あいまいだから直してほしい」という言い方をするのですが、私は最近、ここにこそ大きな未来性を感じてならないです。それは何かと言いますと、私とあなたの主張したいところを真ん中に引き出して、それをいかにして調和をしていこうかということ。これが欧米的に言いますと、実に分かりづらいところでもあります。しかしそこにヒントがあるということを考えております。

もう少し結論として言いますと、最近日本の経済が好ましくないというところで、いま「グ

ローバル・スタンダード」という言葉が流行っているんです。そしてその行き先というのは何かといいますと、「アメリカン・スタンダード」です。これをより具体的に言いますと、「能力主義」です。主体と客体が完全に分離して主体の地位の自由を徹底したものです。これを理想とするものがアメリカン・スタンダードです。これについていかなければ、この日本はもうダメです、という言い方をされているのです。

しかし少なくとも言えることは、いまのアメリカの勝利は制度の勝利であって何ら未来的な制度ではない、と私はそのように言い切ることができます。これまでの西欧近代制度をより徹底した近代最後の姿ではないかとすら思っているんです。

それは何かと言いますと、絶対的なもの、善と悪がはっきり区別されているものがアメリカン・スタンダードです。勝者と敗者がはっきりしてしまっていて、勝者だけが生き残る社会です。現実を主体と客体に分離するものがアメリカン・スタンダードですが、日本の場合は、あなたと私をはっきり分離していません。全体を主体と客体に分離できない世界にこだわり続けていて、その調和を理想として独自の近代世界を切り開いてきたのが日本人なんです。

この理想を投げ捨てて、主体の地位を理想とするイデオロギーに乗り換えていくなどとい

うことは私には考えられませんが。そうすると、日本は日本発の世界ビジョンを持ってグローバル化の波を越えていかなければならない。そこに私は日本の中に西欧近代を超えた未来への可能性を感じてなりません。これが、先ほど言いましたように三つの世界の中の一つです。そこに大きなヒントがあると確信しております。

それは「調和」ということです。つまり調和をしていくことによって、日本の社会は戦後一億総中間層社会をつくり上げてきたんですね。最も貧富の少ない社会をつくり上げたわけです。日本人はそのことに対してもつと見つめ直して、それにより自信を持つべきではないかと考えております。

中間層社会が拡大していたときにどんな社会になるかといえますと、まず治安の安定した国になります。現在、アメリカは経済的にいいと言われているんです。しかしアメリカは中間層が崩壊しています。ですから貧富の差がものすごく拡大しているわけです。ほんの一部の人が金持ちであって、大半の人は下層に落ちているわけです。そうなりますと、まず治安が悪くなっていますね。私はアメリカのようなあのような怖い国には住みたくないと思うくらいです。私は実にこのことを数年前から言い続けているんですが、驚くことにこの前、六月にす

ごい発表が出たんですね。これだけ最後に簡単にちよつと紹介したいと思います。

六月末に国連と世界銀行、IMF、OECDが共同で作成した報告書です。これによりまずと、グローバル化が始まって以来、貧困や貧富の差、社会不安が世界で拡大したと結論づけています。絶対的貧困状態にある人の数は、五年前の十億人から現在は十二億人に増加したということです。現在、先進国と最貧困国の間には七十四倍の貧富の差が存在していると。

世界で最も金持ちの三人が所有する富の合計は、人口六億人を抱える後発発展途上国のGNPの合計を上回るということです。グローバル主義は貧困者に持続的な経済成長をもたらすと考えていたが、実際にはさらに問題が深刻化しており、経済成長などはもたらしていないという結論に達しているんですね。

その意味で、私は先ほど言いました日本の中のもう一つの世界、つまり相手を受け入れて自然を受け入れて調和をしていこうという、いままでもなし遂げてきた日本の社会のあり方に、これからグローバル化といわれる時代、いろいろな国の習慣の違う人たちが、文化の違う人たちがたくさんいるわけですが、その人たちとどのように調和をしてうまくやっていくかということへのヒントがたくさん詰まっているような感じがしてなりません。

今日、私は数少ない例だけでお話をしてしまったので、非常に分かりづらいかもしれませんが、私はその細かいところをいろいろと作業しておりますので、皆さん、できれば私の本も読んでいただいて、より私の話を理解していただければと思っております。そして日本人はこれからも自信を持っていただきたいと思っております。自慢するのと自信を持つのは全く違うので、日本人が自信を持つことによって外国人が日本のことをはつきり分かることができます。そして体系的に日本人のことを、これが日本ですと説明してあげることがより大事だと思っております。

人から言われれば言われるなりに、日本人も一緒になって、この日本はおかしいですと言ってしまうと、さらに外国人が日本のことを理解できなくなっていくます。その辺のところ、何とかうまく説明してあげていただきたい。そしてこんないい国のことをより自覚しながら自信を持って、多くの外国人にも教えてもらいたいというのが私の願いです。

そういう意味で、私は二年、三年で韓国に戻ってしまわなかったことが本当に感謝しかったか、と日本の社会に対して非常に感謝しております。そういう意味で、これから日本の中に長く滞在していきたいながら、より日本の未来性、日本だけの未来ではなくて世界の未

来性を探していきたいと考えております。皆さん、今後ともよろしくお願いします。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。